

# 実践コミュニティの社会的文脈の認知と生成における 身体性の機能的特質についての考察

## Functional Characteristics of Corporeality in the Cognition and Generation of Social Context in Community of Practice

河野 秀樹  
(Hideki KONO)

### Abstract :

The concept of community of practice, defined as a group of like-minded people sharing common concerns, problems, passion or experiences (Wenger, McDermott, and Snyder, 2002), presupposes that knowledge generated and shared in the community is not accumulated information within individuals, but is brought through learning as participation that are situated in the context of practice. In this sense, the learning in a community of practice requires networking of individual members' practices. Therefore, in a community of practice shared understandings of the context of practices as a whole community, along with the individuals' commitment through actions aligned with the context, are indispensable.

In this article the meaning of embodiment in the context of community of practice, and roles the body has as well as its functional characteristics in generating and sharing the social context of the community of practice are discussed. As the theoretical framework of discussion studies in phenomenology and ecological psychology are referred to.

Through the discussion, it has been suggested that the body of a participating individual functions as a major agent that supports the autonomous process of establishing and maintaining the context of practices in the community. Specifically, the body of individual participants collaboratively generates the social context of the community's practices based on its concurrent autonomous semantic segmentation of itself and the environment, and the body also supports the process of collective cognition of the social context through its function of communicating tacit information.

キーワード：実践コミュニティ 身体性 社会的文脈

Keywords : community of practice, corporeality, social context

### 1. はじめに

「実践コミュニティ」の概念がレイヴ・ウェンガー (Lave & Wenger, 1991) により導入されて以来、同概念にもとづく「実践」を基軸とした社会的協働および共創の態様に関する考察

が、社会学、人類学、教育学を中心にこれまで幅広くなされてきた<sup>1)</sup>。学術研究における同概念のもつ強みの一つが、対象となる現象を担う人びとの協働行為としての実践への参加のあり方に着目することで、既存の人文科学諸派の分

析的枠組に縛られずに現象の実相に迫ることを可能とした点である。すなわちそれが依拠する方法とは、構造人類学などがとってきた超越的視座から対象群に規則性を見いだそうとする客観主義的アプローチでも、現象学的相互行為論にみられるような、行為者にとって自明な実践の側面のみを「生きられた経験」として描くことで対象の本質を捉えようとする主観主義的方法でもない。そうではなく、実践という社会ゲームに参加する行為者が、そこに存在する様々な資源を活用し、個別の動機にしたがって他者との競合や折り合いを重ねながら参加を通じた学習を行う過程を描くことで、制度などの外的構造のみを参照した境界概念による視野の狭窄を回避するとともに、自明性のみではすくい取れない無自覚的な志向性や権力関係などの、現実の行為決定への諸条件をとりこんだ包括的な分析上の視座が与えられることとなった(田辺, 2003)のである。

さらに、同概念を通じ、実践で結ばれた集団の成員による活動への参加自体をコミュニティによる「学習」と捉えたことも、従来の学習観を塗り替える契機となった。つまり、実践コミュニティにおける学習とは、知識や技能の獲得といった個人の内的な認知過程ではなく、あくまで参加という活動により繰り広げられる、他者とともにある社会的実践のプロセスに他ならない(田辺, 2003)。そこでは、活動に取り組む人びとのあいだの諸関係とその変容過程こそが学習の本質となる。なぜなら、実践コミュニティにおける実践への「参加」は、参加主体ただ一人の行為のレベルでは記述不可能なものであり、個人の参加様態に焦点化した場合でも、その行為の意味は他のメンバーの行為との関係においてのみ記述されうるからである(高木, 1992)。また、主体に生じたコミュニティにおける役割やアイデンティティの変化は、集団全体の実践構造の変化に直結する。つまり、「『参加』という行為は、主体の学習過程とコミュニティの維持、変化過程が同時に現れてくる場」(高木, 1992, p.270)なのである。

こうして、「実践」を柱とし、コミュニティにおける協働のあり方そのものを分析と考察の対象とする実践コミュニティにあって、その学習

プロセスを構成する主たる要素の一つである成員間の関係性の生成と変容の特質、およびそうした関係の構築と維持のために行われるコミュニケーションの性格に関する論考が、レイヴ・ウエンガーら自身によるものを含め複数存在しているが、実践コミュニティにおける関係構築とコミュニケーションの身体的側面と、そこでの身体の果たす役割を体系的に論じたものは見当たらない。そこで、本稿では、実践コミュニティにおける協働行為と関係構築を支える個人間の相互作用、および協働を通じて立ち現れるコミュニティとしての実践の文脈形成に、成員の身体性がどのように関与しうのか、またそうした身体のはたらきの具体的態様とはどのようなものに関し、主に現象学的身体論と生態心理学からの知見を援用しながら、その機能的特質の理論的考察を試みる。

## 2. 実践コミュニティ概念における参加としての学習の位置づけ

本節では、実践コミュニティにおける身体の機能的特質の議論につなげるための概念的素地を敷くべく、まず実践コミュニティ概念の創始者であるレイヴ・ウエンガー(Lave, J. & Wenger, E.)が提示する「学習」としての実践のあり方と意味を確認しておきたい。すでにふれたとおり、レイヴ・ウエンガー(1993)は、学習を、実践コミュニティにおける様々な活動への参加を前提とし、社会的実践とは切り離し得ないものと捉えている。そこでの学習とは、十全的参加者(full participant)となるべく、全人格(whole person)を巻き込んだ社会的共同体への関与によりなされる。その際、「参加」とは、状況に照らした世界の意味の交渉にもとづくものであり、理解と経験は互いに相互構成的である。つまり、そこでは「人、行為、さらに世界は、思考、発話、知ること、学ぶことすべてに関係づけられ」(p.28)ており、参加による学習は知的活動と身体的活動の二分法により理解されるべきものではないとする。

この行為=実践と学習との関係に関しレイヴ・ウエンガー(1993)が強調するのが、実践を通じた学習では体系だった所与の「教える行為」は必ずしも存在せず、むしろ実践そのもの

が潜在的な学習の可能性を構成する契機となり、実践の結果として共同体としての学習が成立していくとする点である。つまり、実践コミュニティでは予め制度化されたカリキュラムは（少なくとも学習プロセス自体を構成する要素としては）存在せず、成員は事前に設定された知識および技能の習得目標に向けて学習または協働するというよりも、社会的実践を通じ参加の度合いを深めることにより、共同体全体としての実践と学習を構成していくとともに、そこでの自らの位置づけとしてのアイデンティティを構築していくのである。そこでは「学習のカリキュラム」は、実践への関わりの中で自ずと展開するのであり、「学習それ自体が即興で生み出される実践」(p.74)なのである<sup>2)</sup>。

この意味で、実践コミュニティ概念に常に付随して言及される「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation)」における「周辺」性とは、決して成員にとって自明な到達点といった固定的な中心性と対照される概念ではなく、むしろ他のコミュニティへの結節などの多層性も含む、実践への参加のあり方の多様性を示したものとイえる。したがって、周辺性を帯びた参加様態とは、コミュニティの置かれた環境や全体の活動の状況、さらには他のコミュニティとの関わりに応じ、実践を通じその都度参加への意味づけがなされるといった性格をもつものであると同時に、そうした可変的な参加のあり方に照らした自己の位置づけの歴史的認知こそが、成員にとっての学習の軌跡であり、成員としてのアイデンティティを構成する要素に他ならない(松本, 2019)。

こうした、明確な固定的境界も中心も持たない実践コミュニティの実相をレイヴ・ウェンガー(1993)は、「人と活動と世界との時間を通しての関係の集合」(p.81)と描写する。つまり、その外延はコミュニティの置かれた物理的および社会的環境に応じて変化すると同時に、上で述べたようにそれらに応じて成員の参加のあり方も調整され変化していく。一方で、実践コミュニティにおいては、「参加者が自分たちが何をしているか、それが自分たちの生活と共同体にどういう意味があるかについての共通理解」(p.80)が、ある活動システムへの参加

を担保するものである。つまり、実践コミュニティにおいては、制度的、形式的に定式化された集団の枠組への所属自体が参加の成立要件ではなく、共同体内外の物理的、社会的環境とともに変転する活動のあり方に即応するかたちで、個々の成員が全体の活動の態様と自己の位置づけとの関連を実際の実践行為を通じ整合させていくことによって「参加」が構成されていくと考えるのである。

この意味で、周辺の正統参加を通じた実践コミュニティにおける学習とは、多分に社会構成主義的な理論的枠組に沿った社会的現実へのまなざしを反映した概念であるといえる。ただし、このことは、実践コミュニティにおける活動とそこに生起する関係性が、すべて成員と環境および成員間の個別の相互作用に帰結されるものであることを意味しない。実際、そこでは参加の枠組みは固定化されないまでも、何らかの「実践の社会構造」(レイヴ・ウェンガー, 1993, p.81)が存在している。ただし、それは不変的な構造ではなく、「より柔軟な、いっそう深く適応的な」(ハンクス, 1993, p.11)志向性をもつ構造である。ハンクス(1993)は、両者の違いを、古典的構造概念が行動の底流に存在する不変の前提条件と理解されるのに対し、レイヴ・ウェンガーの提示する実践の構造とは行為の可変的な結果として現れる点にあると説明する。具体的には、レイヴ・ウェンガー(1993)によれば、実践コミュニティにより生成、保持されるのは、特定の知識や技術だけではなく、そのコミュニティの遺産への意味づけに必要な解釈上の枠組みである。このことはすなわち、「参加」がそのコミュニティ固有の実践の社会構造としての文化的枠組と文化資源へのアクセスを可能にするとともに、成員がそこでの実践を通じてコミュニティの文化的要素を体得し、さらには自らの実践に反映させることで(おそらくは一定の変更を加えながらも)コミュニティの文化を再生産していくことを意味すると言って良いであろう。かくして、「何らかの知識が存在する文化的実践への参加は、学習の認識論上の原理」(p.81)であり、この実践の「社会的構造、その権力関係、およびその正当性の条件が、学習(すなわち正統的周辺参加)の可能

性を規定する」(p.81) ののである。

### 3. コミュニティ文化への参入における身体性の態様と機能

前節で論じたように、実践コミュニティにおける参加とは、その社会構造としての文化的枠組への参入とその再生産への参画の過程に他ならない。ただしこの参入は、よくそうであると誤解されるような、単に親方的な熟達者に対する観察と模倣を通じてなされる合目的、調和的な参与に限定されず、共同体に存する資源や社会的環境を含む作業環境を反映するかたちで多様で複雑な関与のあり方となって表れる。実際、そうした関与には、成員相互の競合や、組織の周縁的領域に生成する非公式なコミュニティ<sup>3)</sup>への同時的な参加も含まれ、それらもコミュニティ全体の関係性の枠組みを構成する要素とみなされるのである。

まさにハンクス(1993)の言うように、正統的周辺参加は権力関係を含んだ社会構造に関係する複雑な概念であるが、こうした構成的にも意味的にも入り組んだ実践コミュニティの社会的実践への参加とその文化的枠組の理解が、参入の初期の段階にあっても外的な観察による知的プロセスだけをもとには構成されないことを、レイヴ・ウェンガー(1993)は次のように説明する。

まずはじめに、新参者の正統的周辺性は彼らに、「観察的」な見張り役以上の役を与える。新参者の正統的周辺性が決定的に含むのは、「実践の文化を学ぶ」—それを吸収し、それに吸収される—やり方としての参加という事態である。正統的な周辺性に十分長くいることで、学習者は実践の文化を自分のものにする機会に恵まれる。広く周辺の見方からはじめて、徒弟は次第に共同体の実践を構成しているものが何かについての一般的な全体像をつくりあげる。(強調原著)(pp.76-77)

ここでレイヴ・ウェンガーが強調するのは、実践コミュニティにおける共同体の文化的枠組を内面化するプロセスとしての正統的周辺参加(すなわち学習)とは、何よりもまず何らかの行

為的関与を伴うことが前提となるという事実である。実際、学習とは一義的には、「構造の獲得ではなく役割が果たせるようになること」(ハンクス, 1993, p.11)であり、それは共同体のもつ文脈を参照しつつ進展する、個々の成員による何らかのアクション<sup>4)</sup>を伴うプロセスである。そこには(共同の実践が同一の空間で行われるか否かは別として)必然的に、行為の主体としての個人の身体を動員した関与が伴うこととなる。その際、身体は知的理解とは別な位相で、その知覚作用を通じ共同体固有の歴史にもとづく文化的文脈を感得し、同時にその文脈に整合した参加行為を展開していることが想定される。

福島(1993)は、実践コミュニティにおける身体による文化的資源へのアクセスの態様を次のように記述する。

ブルデュー流に言えば、暗黙の内に学習する能力を持つ社会的身体が、この緩やかな螺旋運動の中で、その親方に具体的に代表されている認知・判断・行為の全体的マトリックスを、その共同体に参加するという行為によって、自然と身体化していくという事なのである。それゆえ、ブルデューにおいて抽象的にハビトゥスと語られてきたものは、ここでは熟練のアイデンティティと呼ばれている。これが全人格的な「アイデンティティ」と呼ばれるのは、まさにそれが社会的身体的全領域を含んだ体得であり、決して単にある特殊技能の習得だけではないからである。(p.158)

これに続けて福島は、この共同体固有の文化の「身体化」のプロセスを社会的実践として実践コミュニティの枠組みに定位する事の利点として、ブルデューのハビトゥス論<sup>5)</sup>では扱えなかった、共同体におけるハビトゥス形成の過程がより具体的に表現されうることを挙げている。それは、様々な作業集団における協働で授受、共有されるとするいわゆる暗黙知<sup>6)</sup>の伝達と拡張のプロセスを理解、記述するうえでも、実践コミュニティの概念が一定の参照枠を提供しうることを示唆している。

それでは、実践コミュニティに存するこうし

た社会的文脈としての文化的枠組の認知と再生産における、身体の具体的な機能と態様とはどのようなものなのか。次節以降では、主に現象学的身体論、生態心理学からの知見を援用しながら、その実相と特質を考察するとともに、考察から示唆される身体概念の実践コミュニティ研究への応用可能性を論じる。

#### 4. 実践コミュニティの社会的文脈の認知における身体機能と態様

前節で整理したとおり、実践コミュニティにおける社会的構造としての共同体のもつ実践の文脈性とは、その共同体の歴史、遺産、資源の蓄積からなる実践上の文化的枠組に他ならず、実践コミュニティの主要な構成要素となっている。実際、ウェンガー・マクダーモット・スナイダー（2002）は、あらゆる形態の実践コミュニティを構成する基本要素として、一連の問題を定義する知識の領域（Domain）、その領域に関心を持つ人びとのコミュニティ（Community）、領域内での作業を通じて生み出される実践（Practice）の三つを挙げたうえで、このうち「領域」はコミュニティの目的や価値に関わる共通理解を指すのであり、特定の関心や価値判断の基準として共有されることで「メンバーの貢献と参加を誘発し、学習を導き、行動に意味を与え」（p.63）、メンバー間に実践の共通の基盤と一体感を生みだすはたらきをもつのだとする。この領域とは、個人に共同体への帰属感と成員としてのアイデンティティの認識をもたらす、共同体内での行為選択上の共通の参照枠を提供する点で、共同体の持つ固有の社会的文脈としての文化的枠組そのものと言って良いであろう。

筆者はこれまで、我々の文化的枠組の認知のあり方をめぐる考察のなかで、個人が自己のおかれた文化的環境を認識するうえで、外界の状態の認知とその意味解釈は、単に理知的な分析にもとづくその要素と構成の判別、把握に帰結するのではないことを示すために、知覚のプロセスそのものがもつ環境内の意味に対する弁別能力を措定し、その原理とメカニズムが多分に身体性に依拠するのではないかとの想定から関連領域からの知見を援用しながら論じてきた

（河野，2021，河野，2022）。実践コミュニティが（部分的には多面・多層的にはあっても）固有の文化を持つ社会構造体であれば、そこに身を置き活動する成員によるそうした文化的枠組の認知とその行動への反映にも、身体性が絡んでいることが十分に想定される。

実際、ウェンガー・マクダーモット・スナイダー（2002）は、言語化できない暗黙知の共有に必要な、インフォーマルな学習プロセスの場として実践コミュニティを位置づけ、そこで提供される物語、会話、指導、実習などの学習資源が暗黙知の伝達、共有の媒体となることを指摘している。ウェンガーらによれば、実践コミュニティは暗黙知と形式知を結び合わせる機能を持つため、「知識を体系化する役目を担うには理想的」（p.40）な作業環境である。また野中（2002）は、協働を通じたいわゆるイノベーションにみられる創発的な知識創造には豊かな暗黙知の共有プロセスが不可欠であるとし、そのためには実践コミュニティにおける成員相互のダイナミックなやりとりを通じた固有の文脈の共有が必要となると述べ、実践コミュニティが協働的知識創造にはむしろ必要な環境条件であることを明言している。

実践コミュニティにおいて取り交わされるこの暗黙知は記号化できない性質を持つ点で、その伝達には何らかの身体的チャンネルの動員を伴うこととなる<sup>7)</sup>。具体的にはそうした身体知としての暗黙知の伝達と共有は、実践に際し惹起する感覚や情意に関わる情報の伝達として記号に変換されないままなされるとともに、共有された実践の文脈の認知に際し、たとえば共同体の雰囲気など、コミュニティのおかれた空間のおよび社会的状況の直接的把握となって表れると考えられる。こうした非記号の情報の授受は、解釈や分析といった知的プロセスを介在させないかたちで、しばしば当事者自身も意識しないまま行われている<sup>8)</sup>。

こうした、知的プロセスとは別な位相での、実践コミュニティにおける活動のあり方、他者との関係、さらには状況全体の認知と、それらに底流する共同体の文化的枠組の認知と生成を担う身体機能と特質とはどのようなものかを、以下の節で考察したい。

## 5. 実践コミュニティにおける文化的枠組認知の主体としての身体

### 5.1 実践コミュニティ研究における身体概念導入の意味

コミュニティとしての実践への参加にあたり、各成員には公式、非公式に了解されたあるべき活動の方向性に沿った具体的行為が求められるが、その際、志向された行為の適切さの判断は、言語により明示された目標や規範以前に、コミュニティで歴史的に醸成された文化的文脈に整合するか否かを参照軸として行われると考えられる。前に述べたとおり、実践コミュニティ概念では学習をコミュニティおよびその実践への参加と等価のものと捉えるため、実践コミュニティの文脈では「知る」ことを、「特定の人のびとの特定の状況での活動」(レイヴ・ウェンガー, 1993, p.29)としてみることになる。この意味で知ることと行為とは一体であり、実践コミュニティでは行為を通じた実践知のネットワークがコミュニティとしての学習成果を構成する。

レイヴ・ウェンガー(1993)によれば、そうしたコミュニティでは、個人にとっての「学習」とは、「社会的共同体への関係づけ」(p.39)を意味する。このことから、参加にあたり、個人は共同体全体の学習様態とその変容を見極めながら、自己の行為がそれらにどう関わるのかと同時に共同体の社会的文脈(=文化)が規定する自己の行為のあるべき方向性を認識していくことになるといえる。この、変化する状況全体と自己の潜在的行為との整合という作業は、繰り返しになるが、作業上の変数の多さを考えれば知的な分析の枠組みのみではその最適解を割り出すことは困難であるだけでなく、状況を客体とし対象化して見る視座では、自己を包含する状況の把握と記述は原理上なしえない<sup>9)</sup>。

この課題の克服を図るうえで、認識の主体としての身体概念の有効な視座を提供する。すなわち、知的(もしくは意識的)な状況理解とは別な次元での、我々の身体による自らとの関係の把握を通じた状況の認識の過程を想定することで、成員による活動全体の文脈と共同体の文化的枠組の把握への新たな視座と説明概念が得られると考えられる。実際、我々をとりまく

環境の態様の認識に当たり、身体が有する環境要素の弁別機能が重要な役割を持つことが関連分野からの知見により示されている。

### 5.2 身体による社会的文脈認知のメカニズム

市川(1992)は、我々の身体<sup>10)</sup>には、前意識的な段階で我々を取り巻く環境の意味をその自律的な分節機能により把握する能力が備わっているとす。すなわち、生きてはたらく身体はそれ自体が世界認識の主体として、知的な理解に先だってはたらく認識全体を支えているのであり、身体は自らと環境との関係に応じて己を分節するとともに、環境を意味的に分節している<sup>11)</sup>。市川が「身分け」と呼ぶ、この環境と身体のあいだの相互分節機能は、個人と社会的環境との間にもはたらくことを市川は指摘する。すなわち、「(はたらくとしての身体である)身は文化を介して身分けされていると同時に、文化そのものが身分けの表現(括弧内筆者)」(市川, 2001, p.68)でもある。つまり、個人と共同体の文化の関係で見たとき、ある共同体内に定位しそこで活動する個人の身体は、自らをその固有の社会的文脈性に即して意味的に分節(つまり文化化)するとともに、そうして感受された己の状態を通じ共同体の文化的文脈全体の態様を認識するというのである。具体的には、こうした身体性に根ざした社会文化的文脈の認識は、何らかの情意や体感を伴った共同体全体についての心的表象およびそこで志向された協働の成果の把握として自覚されると考えられる<sup>12)</sup>。

実際の事例から、実践コミュニティにおけるこの身体を通じた社会文化的文脈の把握の態様を見てみたい。まず、レイヴ・ウェンガー(1993)で提示されている四つの事例の一つである。いわゆる分散認知の典型的記述としてよく知られる、ハチンズ(Hutchins, E.)による米国海軍における輸送船航行チーム内で展開する協働的な船位決定プロセスの記述をとり上げる。それによれば、初心者はいくつかのポジションに属す業務の一つずつ習熟しながら、航行チームとしての最終目標である船と目標物との位置関係を海図上に特定するという全体の作業のプロセスに参加することになる。ここで

必要な船位定位という共通の目的のために、初心者と熟練者を含むチームでは測深儀や望遠鏡からの情報の読み取り、その伝達と修正、最終的な海図への書き込みまでの一連の作業が分業のかたちで行われる<sup>13)</sup>。複数の作業ユニット間で情報を伝搬させ海図に反映させるという込み入った作業における船員らの諸行為は、局所(持ち場)ごとに自律的かつ同時並行的に行われ、そこで得られた情報はユニット間の相互のやりとりを通じ組織化されていく。平本(2005)は、ハチンスの表現を引用し、そうした局所間の相互作用の結果、チーム全体としての作業の構造が「自然に」生じてくることを指摘している。さらに、平本は個々の作業が指方規や電話、方位日誌、海図といった道具と相互作用することによって組織化されていることにふれ、作業上必要な情報の認知がそうした道具にも分散しているのだと述べる。

こうした、成員間での相補的協働を成り立たしめている重要な要素の一つとしてハチンス(1992)は、個々の作業のプロセスおよび作業者と道具の相互作用が他の作業にも開かれていることを挙げ、初心者が各作業ステップ間の相互依存性を成員間の関係性の問題として理解することの重要性を示唆している。この道具も含めた一つの機能システムとしての作業チーム全体を網羅する関係性である社会的文脈の把握には、個々の成員間あるいは成員・道具間の相互作用についての理解の単なる積み上げ以上の、マクロな視座からの全体状況についての把握が必要となると考えられる。

上野(2001)は、ハチンスの提示する航行チームの構成する機能システム全体の動作が、ある中心的なプログラムによってコントロールされているのではなく、複数のローカルな相互作用から成り立っており、上で平本も述べているように、そうした一連の相互作用が結果としてチーム全体の秩序を生み出している点をその構成上の特徴として指摘している。上野はこの「デザインなき秩序」(p.268)がボトムアップ的に出現する様を複雑系に属するものと描写するとともに、こうした作業チームにあっては全体的文脈の生成と認知は相互に不可分な一体のプロセスであることを示唆している。

こうしたいわば行為的関与を通じた共同体における実践の社会的文脈の認知と生成は、単に局所的な作業や関係性の積み上げとしての全体構造の構想によってはなしえないことは明らかであろう。なぜなら、共同体全体としての関係性の枠組である集合的文脈生成には、それぞれのユニットでの作業単位を要素としたそれらの間の因果関係の総体としてだけでは説明できない、システム全体を包摂する関係の構造を創出するための別な原理が必要となるのであり、しかも作業チームは共同体内外の環境の変化に応じてその都度更新される動的システムとして機能することになるため、その文脈生成はシステムの所与の初期条件とその構成要素の特質からだけでは予測のつかない性格の秩序形成プロセスとみなしうるからである。

もう一つの事例として、日本の助産所における見習いである後進助産師による、助産に関わる「わざ」の獲得が固有の社会的文脈の中でなされる様を描写した村上(2011)を取り上げてみたい。村上は、開業助産師による助産の現場での観察や聞き取りを重ね、現場では熟練助産師は後進助産師に対して具体的に言葉で指示を与えるよりも、主に現場で自らの実践を見せることで助産のわざを伝えている事実を確認するが、それは、熟練助産師が「自分自身を道具として使っている」(p.350)ことに他ならないという。そうしたロールモデルの実践の様子を含む、様々な物理的および社会的リソースへのアクセスが、助産の場に参加することで可能になる。そこで新参者に伝えられるのは、単なる医療技術としての助産のわざではなく、人間性、価値観、信念、責任のあり方を含む助産師としての姿勢そのものであり、それらが身につくことでその助産所独自のわざが伝承されたことになるのだと村上は言う。その学習プロセスは個々には異なっても、新参者は経験を積む過程で「自分なりの型を作っていく」(p.351)ことで、助産所としての一貫した利用者との関わり方を体現できるようになっていく。

前川(2011)は、現場での共同実践を通じたこのわざの学びが、単なる師の動作の模倣ではなく、学習者が「実践の現場に身を置く」

(p.153) ことを必須の条件として成立していることを強調する。すなわち、後進助産師は熟練者と職場を共にし常にその姿にふれることで、意識するか否かにかかわらずルーティンを含む助産のわざにかかわる技能を「自然に憶えてしまう」(p.153) ののである。それは、学習者による「助産所というハビトゥスの場への参入」(p.153) を意味するのであり、その「社会文化的な状況に影響されながら助産師としての身体技法を身につけていく」(p.153) 学びのあり方を示唆しているのだとする。前川は、助産所での様々な業務への参加を通じた学習が、その(おそらくは妊婦を含む)実践者集団内の社会的関わりから生起する文脈に大きく依拠している点で、これを実践コミュニティにおける学習と位置づけるが、前川によればそこで獲得される能力とは、個人に内在するのではなく、「臨床という場における関係性、文化や風土、雰囲気という特徴に関連づけられる力」(p.154) として経験されるのである。

ハチンスの航行チームの場合と同様に、ここで挙げた助産所のケースでも、現場における関係性、文化、風土、雰囲気として言及されている共同体全体の社会的文脈の認知が、言語などの記号を介した知的理解よりも、むしろ「実践の現場に身を置く」ことを通じてなされる点で、そこでの学びがやはり対象化された知的学習内容の蓄積ではなく、学習者も参画する実践の場全体の文脈性の生成とその直接的認知に主として依拠していると判断できる。学習者はこうして現場での実践の物理的、社会的態様にかかわる情報をその身体で受け止め、「社会文化的な状況に影響されながら助産師としての身体技法を身につける」のであり、そうした文脈に整合するかたちで「自分なりの型」をつくることで結果的に必要な技能を「自然に憶えて」いくのである。

### 5.3 コミュニティの社会的文脈と個人の振り舞いおよび個人間の関係性との整合における身体的作用

上で示したような、個々の成員にとっての知的プロセスとは別な原理による状況認識を通じた共同体での実践への参加には、自己と環境と

の関係性の直接的把握を基盤とし、個々の作業プロセスと全体の文脈とを整合させるべく、自己の行為に然るべき方向性を与えるような認知のあり方を措定することが合理的であるといえる。清水(1996)はそうした特定の社会的状況と個人の振り舞いの間の関係の把握に立った集団全体としての秩序の創出を、人間を含む生命要素の集団がもつ基本的特質の一つであるとし、これを可能にしているのが、我々が状況全体の態様を「場」の情報として感受し、それにもとづいて自己の振り舞いを状況および他者の振りまいと整合させていく能力であるとしている。

清水によれば、活動に関するあるべき方向性の認識を共有しそれに向けて活動する個人の集団にあっては、集団の存する物理的および社会的状況の総体としての「場所」のイメージが自然と共有され、成員はそうして把握された場所の状態と自己の振り舞いが整合的になると同時に成員間でもそれぞれの振り舞いどうしの整合が保たれるよう、互いの間合いをはかりながら自己の行為を決定していくのだとする。これら二つの整合プロセスは、一見別な作業に見えるが、ちょうど即興劇を行う集団において劇場(場所)全体の状態を感得した各演者が他の演者の演技と整合がとれるよう協働的にシナリオ(集合的文脈)を作っていくプロセスに見られるように、両者は集団固有の文脈形成という同一の作業の異なる側面に他ならない。この集合的表現としての文脈形成に参画する成員は、「場所」が提供する環境的情報の感受、それにもとづく自己の役割の認知と行為的関与による集団の文脈形成への寄与、そうして生成・更新される「場所」の状態の再帰的な感受とそれにもとづく次の行為の決定という、循環的な認知と行為の流れの中に置かれることになる<sup>14)</sup>。

実践コミュニティに存する社会的文脈を「場所」の状態と見立てたとき、この「場所」の状態の認知には、先に論じたように個々の要素に還元され得ない、成員間の関係のネットワークを含む共同体全体の関係性の総体が埋め込まれている必要がある。清水(1996)は、こうした自己の存する「場所」の状態を個人に伝える「場」の情報は、対象化された事象の認知とは異



なり、「場所」の一部として場所と一体となった自己の身体を介して惹起する場所の印象として、様々な情意的要素を伴って自覚されるのだとする<sup>15)</sup>。それはいわば、「場所」が「身体に映されている」(p.69)ことを示す。

河野(2011)で論じたように、この身体性に根ざした「場所」の意味の把握は、市川のいう「身分け」、すなわちはたらきとしての身体が自己を取り巻く環境との間で自律的に行う相互分節化のメカニズムを示したものであるといえる。そこでは身体は、知覚された物理的、社会的な環境情報を意識下で処理・統合し、状況全体の心的表象として意識に上らせているのである<sup>16)</sup>。同様に佐々木(1987)は、我々が想起する外界のイメージの生成が運動的要素と深く関わっていることを指摘し、具体的には外界の状況の把握にあたり、表象を介した状況の認知と並んで身体がとる「構え」としての「姿勢反応」がそのイメージ生成の根本原理になっているのだとする。すなわち、身体をとりまく環境の状態に応じて現れる自己塑形的な姿勢の保持である姿勢反応が、知覚の予期や調整を担うはたらきとしてのイメージ生成の起源となるのであり、その意味で「外部世界のリアリティはまず自己のからだに『姿勢』として現れる」(p.122)のだという。さらに、佐々木は、この構えとしての姿勢反応は他者へと伝染する特質をもち、ある姿勢の形成が緊張の波として情動を伴って直接的に伝播するように、特定の姿勢反応の共有による共通のイメージ生成の原理となることで、環境についての共通認識の基盤を構成していることを示唆している。

ここで注目すべきは、姿勢反応を通じたイメージ生成では、姿勢の形成という行為が外界の認知と一体となっており、両者が一つの認知システムとも呼ぶうる機能構造として成立している事実である。そこでは知覚された情報の意味を知的レベルで解釈し、それに応じた最適な行動のオプションを決定するといった意識的な行動選択とはまさに逆の原理による、行為を通じた認知が成立している。

さらに、生態心理学からの知見は我々の「知覚」そのものが行為的関与による情報の取り込みにより構成されていることを示唆している。

染谷(2018)はギブソン(Gibson, J.J.)の知覚システム論を引き、一般に外界の刺激を通過させるチャンネルとみなされる我々の感覚は、環境中の情報を探索し発見する能動的な身体システムと再定義しうるのだとする。すなわち、身体は外界の情報をピックアップすべく、自らの状態に応じてその内部構造を柔軟に再組織しながら、知覚対象が持つ不変な特質を見いだすために、感覚器官のみでなくまさに全身を動作させることで「知覚システム」を構成しているという<sup>17)</sup>。

このように、知覚は我々の身体による自律的な探索行為により支えられているのであり、知覚する身体とは、「情報の複雑さに対応して自らを柔軟に変形させる」(p.212)能動的認知システムである。こうして、佐々木(1987)の表現を借りれば、「動くからだそれ自体が独立して意味を生成する認識の舞台となっている」(p.5)のである。

#### 5.4 身体による環境の意味の共有

さらに、行動する身体は、前述の佐々木が示唆するように、環境との相互分節を通じ自身の内に構成された認識の構図を、他者の身体と共有しうる。実際、市川(1992)は、我々が他者の動きを予期的になぞる「同調現象」を取り上げ、次のような例を挙げながら身体が構造的なアナロジーにより他者の身体と共鳴するだけでなく、他者の役割にも自己を重ね合わせるかたちでそれが志向する動作までも前反省的に自己のものとする様子を描写する。

ボクシングの試合の場合、さいしょはひいきのボクサーの動作に同型的に同調しているにすぎないが、白熱するにつれて、むしろ敵方のボクサーの動作をなぞりつつ、それに応える形で相補的に同調し、ひいきのボクサーの動作を先取りする。(p.182)

こうしてある意味で社会的関係までもも取り込んで他者と共鳴するこの身体のはたらきは、二者間に生起するだけではなく、多数の個人による対話や合奏などの集団的な表現行為においても存在していると市川はいう。このとき、他

者の演奏や言動などの表現行為は、「私の演奏、私の言葉、私の行為によって完成され、またその逆でもある」(p.182)。実際、協働的な表現行為にあっては、はたらきとしての身体が個々の局所的な存在形態を超えて他者の身体と融合するだけでなく、集合的な表現を生むための共同的な作用域を作り出すことを、木村(2005)は、オーケストラの例を引いて示唆している。

(熟達した演奏者らが純粹に自発的に演奏行為を行う場合、)それぞれの演奏者が、すべて各自のパートを独自に演奏しているという確実な意識を持っているだけでなく、他の演奏者すべての演奏をまとめた合奏音楽の全体すら、まるでそれが自分自身のノエシスの自発性<sup>18)</sup>によって生み出された音楽であるかのように、一種の自己帰属感をもって各自の場所で体験している。しかしその次の瞬間には、音楽全体の鳴っている場所がまったく自然に自分以外の演奏者の場所に移って、演奏者の存在意識がこの場所に完全に吸収されるということもあり得る。音楽のありかがこのようにして各演奏者のあいだを自由に移動するということは、別の言い方をすれば、音楽の成立している場所はだれのもとでもない、一種の「虚の空間」だということになる。(括弧内筆者)(p.39)

木村は特定の個人の行為に帰結されないこの匿名的な作用領域を「あいだ」と呼び、それを個人は「明瞭なノエシスの自己帰属感」(p.40)を伴った行為的己の「内部」として体験しているのだとする。こうして、協働的表現行為に参加する各人の内部であると同時に外部でもある「あいだ」に鳴る音楽とは、各演奏者の個人的意志をこえて自律性を獲得した「固有の有機的生命」(p.41)を持つとも言えるものである。

このように、他者の身体と対峙する身体は、同型のおよび相補的同調作用を通じ構造的に相互浸透するとともに、協働の場においては個人のものであると同時に共有された中間領域でもあるような、「集合的でもあれば個人的でもある両義的な身の構造」(市川, 2001, p.55)を呈

することとなる。こうして行為する複数の身体は一つの「共同主観的な場」(市川, 1992, p.182)を生成しているのである。実践コミュニティにあっては、自らの身分けを通じ実践の行われる状況と実践の態様に関わる意味的負荷を帯びた成員の身体は、相互に同調することでそうした環境の意味を他者と共有し、同時に様々な知覚システムにより獲得した情報をもとに共同主観的領域としての実践の文脈形成の主体となっていると考えられる。このとき身体は、「他者の行動の場を単に理解するだけではなく、ほとんどその場を私自身の場として生きる」(市川, 1992, p.160)のである。

## 6. 実践コミュニティにおける道具の意味と身体性

実践コミュニティにおける身体の在処と態様の考察にあたり、重要な視座としてそこで使われる道具の意味と役割にふれておきたい。興味深いのは、先に紹介したハチンスによる航行チームの協働事例についての解説の中で、海図上での船位の決定という単一の表象を得るにあたって、船員たちが測深儀や望遠鏡などの読み取りから海図への書き込みまでの複数の実務を分業で行ううえでの、仕事と道具の「開放性」にレイヴ・ウェンガー(1993)が言及している点である。すなわち、船位決定という共通の目的を果たすために、船員らが共同作業を進める際に不可欠なメンバー相互の関わりを担保するうえで、各自の仕事がチームの他のメンバーに開かれていると同様に、そこで使われる道具と個々の作業者との関わりが他のメンバーにも開かれたものとなって、それらの共同利用が可能な状態となっていることが全体としての職務の遂行に大きく影響することを、レイヴ・ウェンガーは認めている。

実際、レイヴ・ウェンガー(1993)は、実践の中で用いられる道具を含む人工物へのアクセスが許されることで、参加者は単にそれらの使い方を理解するだけではなく、それらが固有の文化的実践の中で用いられる点で共同体の歴史と結びつき、「その文化での生き方に直接的に参加する」(p.85)ことになるのだとする。それは、共同体内に存する知識と、対象を知覚、操

作する共同体独自の方法は、そうした共同に使われる人工物の中に「コード化」(p.53)されているためである。この「コード化」は暗黙知のかたちでなされ、行為者と道具が一つのユニットとして社会的実践を行うことを可能ならしめている(福島, 1993)。

市川(1992)は、はたらきとしての身体には、言語を含む「道具」を自らの構造の内に組み込み、そのはたらきを延長、拡大、深化することで「仲だちされた生成的構造」(p.185)を構成する特質が備わっている述べる。すなわち、それらは身体の構造に組み込まれることであたかも身体の一部であるかのようにはたらくのである。例えば、盲人にとっての白杖や、医師にとっての診断器具などは、行為の媒介物というよりは感覚器官の役割までも持った拡張された身体とも言うべきものである。また、同時にそうした人工物による仲立ちとは、それらの構造が持つ論理に使用者が組み込まれ、それに支配されることでもありと市川は指摘する。これは、市川のいう身体と環境とのあいだの相互分節である身分けの一樣態に他ならない。

上述のように、実践コミュニティで共用される様々な種類の人工物には、共同体固有の実践の歴史と独自の実践のあり方が埋め込まれているといえる。それらに馴染むことにより、成員は身体の一部としてそれらを自らの行為図式に取り込み、共同体固有の作業のあり方を体感的に感得・共有する重要な契機とすることで、共同体の文化的要素をハビトゥスとして内在化するとともに、その図式に沿った実践を行うことで共同体の社会文化的文脈の再生産に参画していくのである。

さらに、先にふれたとおり、広い意味での道具としての「言葉」も同様に身体性を帯び、記号的意味とは別な位相で共同体の社会的文脈の共有と生成に寄与していると考えられる。実際レイヴ・ウェンガー(1993)は、共同体における言葉の使用は、知識の伝達そのものよりも十全の参加者となるための要件に関わる問題であるとし、そこでは「いかに」語るか。また「いかに」沈黙するかといった、共同体特有の言語使用の習得が重要な学習プロセスとなっている。

市川(1992)は、先にふれた身体間の同調現象が、身体による他者の運動行為の素描からさらに進んだ段階として、自然言語を含む記号を媒介として実際の行為がなくともイメージや概念により可能的行動を先取りする「観念的感応」が存在し、実際に小説の登場人物に自己を同一化させることでその世界に没入するといった現象をその表れとして説明している。こうした言語過程とは、単なる約束事としての記号体系の知的理解にとどまるものではなく、伝統と慣習の中で対象のイメージを喚起し、我々を同調へと誘う「ほとんど魔術的な身ぶり」(p.279)ともいうべきものとなっている。

こうした身体レベルでの同調作用を機能上の起源と基礎とする言語の媒介作用は、生田(1987)の言う「わざ言語」の使用にも表れている。ある共同実践の場において扱われる技術や技能の伝承にあたり、単にある事柄を正確に記述、説明するためだけではなく、実践行為と密着する形で相手に「関連ある感覚や、行動を生じさせたり、現に行われている活動の中身を改善するときに用いられる」(p.96)言語である「わざ言語」は、様々な比喩的表現を伴いながら教える者の身体感覚をありのままに表現することで、学習者の身体に同じ感覚を生じさせる効果を持つ<sup>19)</sup>。学習者はこれを受けて、新たに知るべき事柄と比喩との間に類似性を見いだすことを求められる。その意味で、「わざ」の習得プロセスとは、「学習者の身体全体を通しての探求プロセス」(p.99)であると生田は言う。

実践コミュニティにおける行為を通じた共同体固有の技能や慣行の学習にあっても、参加者の身体は単なる知的情報の伝達手段とは別に、行為的関わりの一つとしての言語行動を通じ相互に共鳴・共振し、これを基盤として自己の有する身体的図式を全体の実践的文脈に整合させていると考えられる。

## 7. 結論

本稿では、実践コミュニティにおける成員らによる実践行為を通じた協働的な社会的文脈形成において、はたらきとしての身体がどのような態様と機能を持ち、それによりどのような役割を果たしているのかを、主に現象学的身体論

と生態心理学からの知見を援用して、文献からの事例を参照しながら考察した。

考察により、成員による実践コミュニティの社会的文脈である文化的枠組の認知と生成にあたり、身体は環境との相互分節機能である「身分け」を通じた環境への自律的な意味づけを行うことで、自らを共同体の社会文化的文脈としての実践の文脈に合わせてそのあるべき参加様態を決定するための認知上の契機と参照枠を提供していることが示唆された。併せて、この実践の文脈の認知と生成が一体のプロセスとして成員の実践行為を通じてなされており、そこには共同体の実践上の環境の態様を直接的に把握する身体のはたらきが深く関与していること、さらにそうした身体を媒介とした実践の場の状態の把握が、文脈形成上必要な個々の成員の振る舞い間の整合、および個々の振る舞いと実践全体の状態との整合という営為のための基盤となっていることが考察された。

実践コミュニティにおける実践の文脈の理解の共有に関しては、身体がもつ構造上の同調作用を通じた、共同体での学習に必要な知識や慣習の理解がなされることで実践全体の文脈の認知と再生産につながっていること、またそうした身体レベルでの同調には、拡張された身体としての道具が大きく関与し、その一形態としての言語も身体性を帯びることで実践コミュニティにおける実践知を伝えるための媒体となっていることも示された。

最後に、実践コミュニティ研究に身体概念を持ち込むことの意義とその応用可能性にふれておきたい。これまでの考察から、実践コミュニティにおける成員による実践の社会的文脈性の認知と生成には、多分に身体性が関与していることが示唆された。このことは、身体性を起点とした、実践の態様とその変容の記述の可能性が開かれうることを意味するといえる。すなわち、上述した環境との相互分節機能により共同体としての実践のあり方を自らの構造に反映した身体の態様を内側から記述することにより、外部からは捉えきれなかった実践の構造の相貌、特に成員間の関係のあり方およびそれと共同体としての実践との関連性についての記述への道が開けることが期待されるのである。

これまで実践コミュニティにおける実践のあり方と実践による成果の検討にあつては、その対象は基本的に外部からの観察が可能な事象に限定されてきた観がある。具体的には、可視化可能な成員の行為の態様、および成果物としての物的、心的効果や成員の行動変容を特定し提示する手法が主にとられてきた。こうして、実践における学習のあり方や成員間の関係の構造を重視する実践コミュニティの研究にあつて、学習の進展に伴う個々の成員による役割や参加様態の認知、さらには全体的関係性としての実践全体の文脈の態様と変化の過程を記述するうえで、外部からの観察が可能な事実や、聞き取りなどによる成員の心理的状态の変容についての語りの内容を記述することが、方法上の視座として標準化されてきたといえる。

無論、こうした成果物や語りの記述は、それを生み出した共同体における学習とそれに即した成員の内的プロセスの反映であると捉えること自体には問題はないであろう。一方で、そうした学習プロセスのアウトプットとしての現象やアーティファクトにのみ着目する視座からは、実践の文脈および個々の成員間の関係性の実相と変化の動的プロセスについて、当事者の視座にたった記述は適わない。特に、前述したように自己の存する状況の記述は、自己をそれから切り離し対象化する形で行うのでは不完全なものになってしまう<sup>20)</sup>。実践に伴って生じている成員による共同体内での自己の位置づけの認識や文脈の認知の態様のリアルタイムの記述は、当事者らが感じ取っているその場の状況を記述者自身も体感するかたちで記述する以外にはなしえないのである。

この当事者の視座からの実践の記述の具体的方法として、例えば鯨岡（2005, 2013）の提唱する「エピソード記述」が考えられる。自ら保育の現場に関わってきた鯨岡は、外部からの観察のみによる行動中心主義と客観主義にもとづくアプローチでは、現場での人どうしの接触場面である「接面」で生じている感情の動きや生き生きとした状況の認知の記述が捨象されてしまうと指摘する。鯨岡は、生きた人間どうしが関係し合う営みの実相の記述には、むしろ当事者が現場で感じ取っている雰囲気や自己の内に

惹起する情動をありのままに記述していくことでその本質に迫れるのだとしたうえで、そうした記述は単なる参画する当事者の独我論的な主観の吐露なのではなく、観察者としての研究者を含む実践の場を共有する者たちが間主観的に感じ取っている現場の態様を自己を通して捉え、表現したものに他ならないのだとする。上述のように、その記述対象は観察可能な行動的事実に加え、現場に身を置くことで感受される、実践の当事者にとっての「いま、ここ」での思いや気持ち、個人の固有な振る舞いの与える印象、さらにその場に醸成される「生き生き感」や独自の雰囲気など、観察者の主観においてとらえられる体験的内容となる（鯨岡, 2005）が、これらは基本的に身体性を伴った非記号の情報であるため、外部からの観察では捉えられないものと考えられる。こうした、実践への参加者自身がその身体を介して感取した実践全体の態様や他者との関係のあり方、さらにはそれらにより醸成された共同体における自己の位置づけとしてのアイデンティティについての感覚を、本論で論じたような行為する身体による意味的分節化により生成された状況のイメージとして意識化されたものと捉えることで、実践コミュニティにおける社会的文脈形成のプロセスと成員の参加様態の実相に迫る記述が可能となると考えられる。

本稿では、実践コミュニティという社会的営為の枠組に関する一説明概念に照らした身体の機能を、関連分野の知見を用いて理論的に考察するという、抽象度の高い議論の展開となった。それにあたり、いくつかの事例を引用したものの実証的要素が薄くなったことは否めない事実である。今後、実際の実践の文脈にいかにか小論でなされた考察が適用されうののかを、対象を様々な形態の実践コミュニティに広げるとともに、実地研究を通じ探っていきたい。

## 【注】

- 1) 「実践コミュニティ」概念の詳述は紙幅の関係から本稿では省くが、詳しくはLave & Wenger (1991)、Wenger (1998)、松本 (2019)、河野 (2022)などを参照されたい。
- 2) レイヴ・ウエンガー (1993) は、教育する側として明確に位置づけられた立場にある者が「教え込み的 (didactic)」に学習資源を提供することを前提とした「教育のカリキュラム」と、実践コミュニティにおける正統的周辺参加を基本構造とする「学習のカリキュラム」とを明確に区別する必要性を説く。(p.79)
- 3) Wenger (1998) はこれを「隙間共同体 (interstitial community of practice)」と呼んでいる。
- 4) レイヴ・ウエンガーは実践コミュニティでの学習プロセスにおける行為的関与には言語によるものも含まれることを指摘している。これについては後段の節で扱う。
- 5) プルデュー (1988) は、ある社会集団において形成、共有される心的諸傾向がシステムとして内面化されたものを「ハビトゥス」と呼び、これが身体的に習慣化されることでその集団や階級共通の行為選択の契機となると述べた。
- 6) 暗黙知とは元来ポラニー (Polanyi, 1966) の提唱した、事象の認知を支える非記号的方法知を指す。ここでは、言語や数値で示される「形式知」の対概念として、技能や情意といった言語化しづらい情報一般として用いる。
- 7) ここでは「身体」を、単に解剖学的、生理学的に可視化されうる物理的身体だけではなく、市川 (1992) のいう「はたらきとしての身体」にあたる、知覚、情意、直感などの認知過程を含む実際に生きてはたらく身体の機能の総体を指す概念として扱う。
- 8) 例えば野中・紺野 (2000) は、協働を通じた知識創造における暗黙知の共有プロセスである「共同化」では、身体知としての暗黙知の生成が主体の意識作用を排したいわゆる純粹経験の場でなされるのだとする。
- 9) 自己の存するシステムを対象化した記述を行おうとすると、いわゆる自己言及のパラドクスに陥り、論理矛盾を生ずることとなる。(清水, 1996)
- 10) 先に示したとおり市川のいう「身体」とは、物理的な身体に限定される概念ではなく、上でふれた感覚、情意、直感などの非記号的な認知領域に関わる身体の機能そのものを指す、「はたらきとしての身体」である。

- 11) 市川 (1992) は、身体と環境とのあいだの相互分節の例として、我々の「気分」に応じて世界が異なって見える一方、外界の状態により気分が影響されることを挙げている。
- 12) 例えば、状況全体の様態をあらゆる情報は、ある場所のイメージや印象といった何らかの心的表象となって自覚されうる。(河野, 2011)
- 13) 具体的には、両舷に位置する方位測定係が、指方規を用いて船の現在位置から見た海岸線の目標物の方位を目測し、それを電話で操舵室内の方位測時計録係に伝える。次に方位測時計録係はその方位を方位日誌に記帳し、さらに隣の作図係が海図に位置決め線を引き、船の現在位置が確認される。(平本, 2005)
- 14) 清水 (1999) はこの個人にトップダウンで与えられる「場」の情報にもとづく行為選択と、その実行がもたらすボトムアップでの場所の状態の更新の円環的プロセスを「ホロニックプール」と呼ぶ。
- 15) 清水 (1996) はそうした場所の印象は、具体的にはその場所の雰囲気やそこで喚起される快不快の感覚などのかたちで情意を伴って意識化されるとする。
- 16) 市川 (1992) は意識下レベルで自律的に組織化される身体のはたらきを「向性的統合」と呼び、これがある種の「かまえ」となって意識レベルの身体機能の統合である「志向的構造」を支える準備態勢を構成するものとしている。
- 17) Gibson (1979) は、「視覚」も感覚器官としての眼の機能だけでなく、観察者自身の動きを通じた対象の不変項を特定するための探索活動がシステムとして行われることで成立していることを明らかにしている。
- 18) 木村は、演奏の表象的側面である「ノエマ」的側面に対し、行為的側面を「ノエシス」面と呼ぶ。この点で、フッサールのいう意識の作用的側面としての「ノエシス」とは別な意味を持つ。
- 19) 生田 (1987) は、わざと言語の具体例として日本舞踊の型などの教授プロセスで師匠が発する「ためて、ためて」、「膝をもっと入れて」といった主観的な言語表現を挙げている。
- 20) 第5節と注釈参照。

## 【引用文献】

- 生田久美子 (1987). 『「わざ」から知る』東京大学出版会.
- 市川浩 (1992). 『精神としての身体』講談社.
- 市川浩著, 中村雄二郎編 (2001). 『身体論集成』岩波書店.
- 上野直樹 (2001). 「デザインされた知性」上野直樹 (編) 『状況のインターフェース』(pp. 265-281) 金子書房.
- ウェンガー, E, マクダーモット, R., スナイダー, W. (2002). 櫻井祐子 (訳) 『コミュニティ・オブ・プラクティス』翔泳社.
- 木村敏 (2005). 『あいだ』筑摩書房.
- 鯨岡峻 (2005). 『エピソード記述入門：実践と質的研究のために』東京大学出版会.
- 鯨岡峻 (2013). 『なぜエピソード記述なのか：「接面」の心理学のために』東京大学出版会.
- 河野秀樹 (2011). 「共空間内〈場〉生成過程における身体性の性格と機能についての理論的考察」『目白大学人文学研究』7, 37-59.
- 河野秀樹 (2021). 「多文化性再考—文化としての身体性からの考察—」『目白大学人文学研究』15, 117-130.
- 河野秀樹 (2022). 「文化を知り 伝え むすび 超える 身体：文化的枠組生成と共創についての身体論的視座からの考察」『「縁側」知の生成にむけて：多文化関係学という場の潜在力』(pp.245-268) 明石書店.
- 佐々木正人 (1987). 『からだ：認識の原点』東京大学出版会.
- 清水博 (1996). 『生命知としての場の論理—柳生新陰流に見る共創の理』中央公論新社.
- 清水博 (1999). 『新版 生命と場所』NTT出版.
- 染谷昌義 (2018). 「実在論の根拠—ギブソンの『生態学的知覚システム』解題」佐々木正人・國吉康夫編『身体とアフォーダンス』(pp.195-214) 金子書房.
- 高木光太郎 (1992). 「『状況論的アプローチ』における学習概念の検討--正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation) 概念を中心として」『東京大学教育学部紀要』32, 265-273.
- 田辺繁治 (2003). 『生き方の人類学 実践とは何か』講談社.
- 野中郁次郎・紺野 登 (2000). 「場の動態と知識創造：ダイナミックな組織知に向けて」伊丹敬之, 西口敏宏, 野中郁次郎編『場のダイナミズムと企業』(pp.45-64) 東洋経済新報社.
- 野中郁次郎 (2002). 「解説」ウェンガー, E, マク

- ダーモット, R., スナイダー, W. (2002). 櫻井祐子 (訳) 『コミュニティ・オブ・プラクティス』 (pp.333-343) 翔泳社.
- ハチンス, E. (1992). 宮田義郎 (訳) 「チーム航行のテクノロジー」安西祐一郎・石崎俊・大津由紀雄・波多野諠余夫・溝口文雄編『認知科学ハンドブック』(pp21-35) 共立出版.
- ハンクス, W. (1993). 「序文」レイヴ, J.・ウエンガー, E. 佐伯鮮 (訳) 『状況に埋め込まれた学習: 正統的廃辺参加』 (pp.5-22) 産業図書.
- 平本毅 (2005). 「社会的分散認知システムとしてのCMC—電子空間はどこに存在するか—」『立命館社会産業論集』 41, 3. 133-154.
- 福島真人 (1993). 「解説」レイヴ, J.・ウエンガー, E. 佐伯鮮 (訳) 『状況に埋め込まれた学習: 正統的廃辺参加』 (pp.123-165) 産業図書.
- 前川幸子 (2011). 「『わご言語』が促す看護実践の感覚的世界」生田久美子・北村勝朗編著『わご言語: 感覚の共有を通しての「学び」へ』 (pp.135-162) 慶應義塾大学出版会.
- 松本雄一 (2019). 『実践共同体の学習』白桃書房.
- 村上明美 (2011). 「『生命誕生の場』における感覚の共有」生田久美子・北村勝朗編著『わご言語: 感覚の共有を通しての「学び」へ』 (pp.335-361) 慶應義塾大学出版会.
- レイヴ, J.・ウエンガー, E. (1993). 佐伯鮮 (訳) 『状況に埋め込まれた学習: 正統的廃辺参加』 産業図書.
- Gibson, J. J. (1979). *The ecological approach to visual perception*. Houghton, Mifflin and Company.
- Lave, J., & Wenger, E. (1991). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge University Press.
- Polanyi, M. (1966). *The tacit dimension*. Doubleday.
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: Learning, meaning, and identity*. Cambridge University Press.